
ONE FOR ALL

田沢舞矛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE FOR ALL

【Nコード】

N1549Y

【作者名】

田沢舞矛

【あらすじ】

いろいろな駄文を載せていくつもりです

警視庁中心キャラです

主に高佐でいきます

大抵は舞矛が担当します**理江の場合はリクがあればの担当とな

ります

瞳の中の美和（佐藤＋宮本）（前書き）

ちゅくりですー！！

瞳の中の美和（佐藤＋宮本）

佐藤さん！！佐藤さん
：

あの日はどうなったのか

「捜査一課の刑事なら起きなさいよ」

お母さん泣かないで

「行かないで・・・一人にしないで」

「僕、まだ貴女に伝えたい事があるんですよ」

二人で話さないでよ・・・

あの日は米花サンプルザホテルの化粧室で撃たれた

意識は微かにあった。。

でも起きられない

声が聞こえる・・・

「泣いてる」声が・・・・・・

「美和子のバカア気を付けなさいよ！自分の身は自分で守れつつも言ってるのは美和子でしょ・・・」

由美の声

「蘭さんを守ってくれたのは有り難いがお母さんを困らせないであげて下さいよ・・・」

白鳥くんも・・・

『白鳥！トロピカルマリナランドだ！！風戸が拳銃を・・・』

そうよ風戸が犯人なのよ

「高木くん、美和子が心配なのは分かるけど事件よ終止符切れるかもしれないのよ」

「でも・・・」

「高木のバカ！美和子なら大丈夫よ早く行きなさい！！！！」

「／／わかりました。由美さん、佐藤さんのコトお願いします」

・・・

「美和子ーもう終止符切るから早く起きてよね・・・」

由美・・・目の下の隈、でかいんだろうな・・・

あれからもう1ヵ月か…

声も涙も汗一つでない

私の体は機械に占領されてるだけ・・・このマスクも私に無理矢理
空気を吸わせ吐かせてるだけ…

「美…和子…」

「- - - - - . . . い」

「!!!!!!」

「由…いかなかな…」

声がでた

「由美ー泣かないで」

「美和子!!」

「犯人は風戸…米花サンプラザホテルにあったビニール傘をみて…
」

「美和子…お母さん・・・美和子が・・・」

「美和子!?!」

「久しぶり・・・?」

「お医者さん！！目を覚ましました〜美和子が…」

「もう大丈夫です」

「事件は？」

「今解決したわ・・・蘭ちゃんも記憶取り戻したから・・・」

「良かった・・・寝ていい？明日また報告・・・ウグツ！！」

「1ヶ月寝たんだから大丈夫よね〜」

「由美、寝てないの？」

「もー誰のせいだと思っているのよ〜」

「あハハ・・・ゴメン」

2ヶ月後

風戸先生は「無期懲役」と裁判で下された

「美和子〜いつ退院？」

「2週間後よ」

「・・・あの時殉職してたら警視總監くらいには・・・」

「罰当たりなコト言わないでよ」

松田くんを越えることはできる。でも父を越えることはムリ。だから生きている内に越えたい
高木くんに抜かされたくはないけど

「今回のってコナンくんのお手柄？」

「いやー蘭ちゃんかと・・・」

「二人か・・・」

「美和子？」

「二人とも刑事にならないかしら」

「クラブのさそいじゃないんだから」

「いいのいいの」

「もー」

夏（高木×佐藤）（前書き）

季節ハズレの為、寒いかも・・・ご了承ください

夏（高木×佐藤）

「涉くーん早く早く!!」

減るものじゃない

そい言ってるのに彼女のはしゃぎっぷりには驚愕する

「確かに減るもんじゃあないけど時間は確かに減るわよ」

今、僕たちは海にきている

彼女に

「退院したら何処に行きたい？」

って聞いたら

「海」

と短く言われたので彼女の非番の日・・・今日、海水浴場にやって来た

「彼女一人？」

「「はっ？」」

「俺たちと楽しいことしない？」

「あっあのー彼女は渡しませんよ」

「一人なわけじゃない。確かに涉くんは影薄いけどこんなに近かったら見えるでしょ？」

「……佐藤さんある意味酷いですね／＼

「この人達なんか見覚えないですか？」

「あー私も今、そこにひかかってて」

「探って見ますか？」

「勿論よ」

力強い瞳……

本当に彼女は1カ月間意識がなかった怪我人なのか……

「涉くんはケツテとチャジユウを」

ケツテ

警察手帳といえど犯人などマル秘人物にバレるため適当に訳した内の一つ

チャジユウ

チャカと拳銃を混ぜたもの
同じく訳した内の一つ

「了解」

「私はカフェ「ハネヤスメ」に誘って居るから」

「わかりました。気をつけて下さいね」

「わかったわ」

佐藤^バ

「ねえねえ、カフェ「ハネヤスメ」に行かない？喉渴いちゃって」

「おおいいねえ俺達も丁度昼も食ってねえし喉も渴いててよお」

「じゃあ行こう」

高木^バ

佐藤さん大丈夫かなあ

・・・警察手帳は鞆のポッケの二番目・・・拳銃はそこに・・・

手錠は・・・あつたあつた

三番目のポッケか・・・

佐藤^バ

「職業なにやってるのかしら？」

「あつ俺っすか？俺は洋裁店の看板で手芸を・・・」

洋裁・・・手芸・・・

あつ今回の＞高速道路パーキングエリア強盗事件くの・・・

確か年齢は・・・

「年齢って24歳？」

「すごいすね・・・ビンゴっす」

ゴメンねこっちもビンゴよ

「佐藤さん、後ろにいますから」

後ろを見ると高木くん…

右を見ると白鳥くん

前を見ると高野さん…

なんで？

「今回の高速道路の手配の犯人で間違いないわよ」

「

「ええ」

「私を背負い投げするから高木くんは手錠を」

「了解しました」

「・・・貴方、指名手配中の近藤英介で間違いないわね」

「へっ？」

近藤の体が宙に舞う

「近藤英介！！逮捕する！！」

13時11分近藤英介は逮捕された

「お手柄だったよ佐藤さん、高木くん」

「ハハハ・・・」

「高木くん、後で取調室に」

その日の取り調べは5時間に及んだとさ

END

夏（高木×佐藤）（後書き）

高野さん、白鳥さんがいた!! デートの張り込み

って言っても私の中では佐藤、高木は東都タワーのあの時からの付き合いーって事なのでまだデートじゃあナイス・・・

分かりにくくてすみません

117 (高木 + 佐藤 + 宮本 + 千葉) (前書き)

早とちりしてみた

117（高木＋佐藤＋宮本＋千葉）

「・・・美和子？」

「あつえーっ・・・由美・・・」

「もーなに考えてたのよ」

「うん・・・ちよつとね」

「11月7日か・・・」

11月7日、松田くんの命日

「去年やつと逮捕されたんだよね」

「・・・そうね」

松田くんは3年前殉職した

去年高木くんは死神に連れていかれそうになった

「私ってやつぱり死神なのかなー」

「・・・ぷっ！！！！アハハハハハ！！こんなに美人な死神が居たら逆に見てみたいわゝヒヒヒ」

「ちよつとそんなに笑わないでよゝてか美人って・・・由美の方が断然綺麗で可愛いって」

「死神・・・アハハ」

「・・・」

「あれっ？美・・・佐藤さんと由美さん・・・」

「あら・・・高木くんー取り調べは？」

「・・・取り調べなんかとつくの昔に終わりましたよ」

「そうっすよー高木さん今回叫んで犯人びびらせて・・・大変でしたよ犯人が気を失って・・・」

あら千葉くん・・・

「アッシーくん、叫んだのかね・・・アハハハハハ」

「もーさっきから笑いすぎよー」

「佐藤さん、由美さん、どうして笑ってるんですか？」

「・・・絶対言わない」

「・・・ひどいですよ」

「・・・早く取り調べを終わらせた理由は？」

「・・・へっ？」

「だって高木くん、理由がなかったら「早く吐いて楽になりましようよ」で進めるじゃない」

「ー…ヘタレって意味ですか？」

「んーちよと理由…・意味が違う」

「あつあのー今日は7日ですよね・美和「フハハハハハハハハハハ」」

「……由美の声に邪魔された

「由美、静かにして!!」

「あつ……あの・フハハ」

「……高木くん何て？」

次の瞬間……

いきなり彼は私に抱きついてきた

「今日は7日……11月7日です！大切な人がいなくなっただけです……顔を見せたかっただけです……ダメですか？」

温かい……そうだ彼はここにいる

「高木くん、佐藤くん、付き合うことはいいが……非番の日か……せめて警視庁内ではやめてくれないか」

「めっ 目暮警部・・・」

「・・・30分時間をやる・・・佐藤くんも泣いてるようだし・・・
だが帰ってきたら倍は頑張ってくれよ」

「あっありがとうございます!!」

僕は走った

二人で手を繋ぎ

END

117 (高木 + 佐藤 + 宮本 + 千葉) (後書き)

なっなんだこの小説はああ!!駄文だ!!!

青山先生ごめんなさあああい!!

千葉さんのセリフいっかいだけ - - - - -!!

高佐愛してる!!!!!! (ドサクサ)

松田と高木（松田 佐藤&1t・ii >・高木）（前書き）

コナンの「帰らざる刑事」などいろんなセリフを混ぜて作った（パ
クった？）文です

知らない間に長くなってました（汗）

心して読んで下さいませ

松田と高木（松田 佐藤 & 1 t・i i & g t・高木）

私が何故松田くんに興味を持ったのか分からない

「毎年の11月7日に321とファックスが送られて来ている…数字の…間違いねえ…こいつは爆弾のカウントダウンだ…奴が動くな…今日しかねえぜ…」

「何言ってるのよ…爆弾かなんて確信持てないわよ」

「我は円卓の騎士なり…愚かで狡猾な警官諸君に告ぐで本日正午と14時に我が戦友の首を弔う面白い花火を打ち上げる…止めたくば我が元へ来いで72番目の席を空けて待っている」

「何よそれ…」

「今、送られてきたファックスだ」

「どこ行くのよ」

「わからねえのか？円卓の騎士が72番目の席を空けて待ってるって言ってるんだ！円盤状で72も席があるつつたら…杯戸町のショッピングモールにある大観覧車しかねーだろ？」

行かないで…嫌な予感がする…

「勇敢なる警官官よ…君の勇気を称えて褒美を与えよう…もう一つ

のもっと大きな花火の在処のヒントを表示するのは爆発三秒前：健闘を祈る」

松田くんは萩原くんの所へ旅立った

沢山の命と引き換えに…

三年後

「俺は剛球豪打のメジャーリーガー…さあ延長戦の始まりだ…試合開始の合図は明日正午終了は午後三時…出来のいいストッパーを用意しても無駄だ…最後は俺が逆転する…試合を中止したくば俺の元へ来い…血塗られたマウンドに貴様ら警察が登るのを鋼のバッターボックスで待っている…」

コナンくんのおかげで東都タワーに爆弾が在ることがわかった

「勇敢なる警察官よ…君の勇気を称えて褒美を与えよう…試合終了を彩る大きな花火の在処を…表示するのは爆発三秒前…健闘を祈る…」

「行かないで…私を置いてきばりにしないで…!!」

「すみません…でも佐藤さんならわかってくれますよね…」

コナンくんのおかげで爆弾の場所はわかった

「まっ待て俺じゃないんだ…ホッホラ…よくあるだろ？頭の中で子供の声がしたんだよ…けっ警察を殺せって…いいや誰でもいいから殺せって…そっそうさ…だから俺のせいじゃ…」

こんな奴に…こんな奴に松田くんを…

「うわあああああああ」

こんな奴に…！！

その時高木が佐藤を押し倒した

「なっ何やってんですか…いついつも佐藤さんが言ってるでしょ…」

「誇りと使命感を持って国家と国民に奉仕し、恐れや憎しみをとらわれずに、いかなる場合も人権を尊重して公正に警察職務を執行しろ」って…そんなんじゃ松田刑事に怒られちゃいますよ…」

「

忘れさせて・・・

「バカア！！！！忘れさせてよ～～～バカ～～」

「ダメですよ忘れちゃ…それが大切な思い出なら忘れちゃダメです…人は死んだら人の思い出の中でしか生きられないんですから…」

「バイバイ松田くん…でも忘れないからね…」

松田と高木（松田 佐藤&1t・1t>・高木）（後書き）

松田くん

佐藤の心

わしづかみ

575で表すところな感じ（笑）

秋晴れ（高木×佐藤）

「今日はいつもより暖かいわね」

今日の気温は26

昨日と比べれば6も上がっている

「そうですね…今日は上着なしで十分ですね」

「涉くんなら半袖でもいけるんじゃない…」

…確かにね

「後で柿、剥くから」

「・・・僕が剥きます!!」

佐藤は高木を睨み付ける

「私は柿とかのカワムキならできるのよ」

「意外ですね」

「言葉に出さないでよ…バカ」

今日は例年に比べれば暖かい…

そして僕たちも変わらずに暖かい

「涉くん愛してる」

「僕もです」

「…今日の夕方予定ある？」

「沢山あるけど…」

「泊まっていてください」

わかった

秋晴れ（高木×佐藤）（後書き）

甘い話を書きたいが経験がないためムリでした

例え・・・（高木＋佐藤＋小学生）（前書き）

ちび美和

内容は馬鹿馬鹿しくてスミマセン

例え・・・（高木＋佐藤＋小学生）

「うわああああ！！！？？」

部屋に入ると一人の女の子・・・いや、女性？が寝ていた

「ん…涉くんお帰り」

「あつあのお・・・」

「なによ」

誰だろう…この子は

「あのおどちら様で？」

「はっ？涉くん何言っているのよ」

それは僕のセリフ

「お名前は？」

部屋に無言が漂う

「とうとうボケてきた？警視庁捜査一課強行犯第3係の佐藤美和子
よ」

いや！！佐藤さんはもっと身長が高い……でも顔立ちは佐藤さんに似ているなあ

「渉くん？」

「…冗談はやめて下さい」

相手は戸惑った顔で聞いてくる

「何いつてるのよ…」

「正義と言つ言葉は」

この前美和子さんと決めた合言葉

「決して口から出すものじゃない」

ピッタリあっている

「美和子さん？」

「？」

「美和子さんですよね？」

「なによ…KIDにでも見える？」

「いえ…でも…が鏡を見てください」

「ええ」

「……きゃあああああああああああああああ」

なんだなんだ!?

「どうしたんですか?」

「わっ私、縮んでる…小学生の姿になっている…」

いまさら…ですか

「小学何年くらいで?」

口元到人差し指をのせ、考え込んでいる彼女の姿がとてつもなく可愛く微笑んでしまう

「えつとねえ…1年かな」

コナンくん達と一緒に…

「私明日から捜査いけない…」

「えつ…」

「家にも帰れない…」

「あつ…涉くん今から暇?」

「えつ? あつ暇ですけど…」

「私んちから服取ってきて」

「さすがに大きすぎて入りませんよ」

今の彼女は…例えるなら灰原さんくらいの身長だ

「違うわよ…私が昔着ていた服よ

」

「でも、僕が着るとは言えませんが…」

「急遽親戚の子がきて服がないから美和子さんに聞いたらあるって
言って…だから貸してって言えば良いじゃない」

確かに

「じゃあ僕、貰ってきます」

「頼んだぞ！高木渉巡查部長」

「今晚わー高木です…」

少ししてからドアが開いた

「まあ…高木さん？また美和子、酔いつぶれましたか？」

あーこのお母さんにとって僕がくる＝美和子さんが酔いつぶれる…か

「いえ…少し用事がありまして…」

「そう…立ち話もあれだから入って下さい」

「こうやって見ると佐藤さんってお母さん似なんだなあ……」

「どうかしました?」

「いいえ……そのお……お願いなんですけど……美和子さん………下さ
い!」

「えっ?」

「あの……美和子さんの昔着ていた服を少しのあいだ貸してください
!」

「なんだ……いいけど美和子には……」

「大丈夫です!許可は取りました!」

次の日僕は帝丹小学校に美和子さんの転校届けを市役所に出しに行
き、一課の目暮警部には本当の事を話した

「そらまた奇妙な……佐藤君には学校が終わったら警視庁にくるよう
言っておいてくれ」

「了解しました」

「今日からこのクラスのメンバーになる高木美和です宜しくお願いします」

次の日私は帝丹小学校に転校？した

「美和ちゃん美和ちゃん！！こっちだよ！！コナンくんの隣」

「あら…ありがとう、歩ちゃん」

「もう私の名前覚えてくれたの？美和ちゃん覚えるの早いね」

「いついや…そのお…」

「ハイハイみなさん高木さんにはアレですが今日はテストdayです」

頑張って全部埋めようね」

「はあい」

いきなりテストかあ…

簡単ね… 13 + 55 = 68 そりゃあ68よねえ

漢字は「はながさく」

を升目に書くのだけど…咲くって一年だっけ…

まあ空けて間違えるよりは書いておくほうがいいか

「はい終了」高木さん、範囲は大丈夫でしたか？」

「はい、全部習ってます」

そりゃあ28歳（推定）ですから

「ピルルルル…こちら警視庁、各局に次ぐ…帝丹小学校に不審者あり、すぐに処置を」

「「不審者あ？」」「」

クラス全員がサケブ

「小林先生、すぐに窓を閉めて下さい」

「高木さん？」

「美和ちゃんどこいくんだよ」

「あっ…」

カバンから手錠、警察手帳、警棒を取り出す

「美和ちゃん？」

「私は前のドアを閉めます、元太くん、後ろのドアを閉めてね」

「でも高木はどうすんだよ」

そりゃあ「犯人を逮捕しにいくわ」

「美和ちゃん危ないよ……」

「大丈夫よ步ちゃん、捜査一課の刑事をなめないで」

その時ケータイが鳴り出した

「はい、こちら佐藤：高木くん!？」

電話の相手は相棒の高木

「管理棟二階ね：目暮警部に私が行くなって報告しておいて：うんじやあ」

「美和ちゃん本当に行くの？」

「……誇りと使命感を持ち国家と国民に奉仕し恐れや憎しみにとられず、いかなる場合も人権を尊重して公正に警察職務を執行しろ：それが父の教えよ」

「美和ちゃん警察官じゃないんだから大丈夫よ」

「大丈夫、警視庁捜査一課強行犯担当係をなめないで」

「キタツ…元太くん！！鍵閉めて！！」

叫ぶ

「ああ・・・」

「この餓鬼んちょ…どけよ」

「あら…28に対して餓鬼はないんじゃない？」

「っ…」

「高木！」

「元太くん！？」

元太が廊下に飛び出してきた

「高木…俺がみんなを守る…早く教室に戻れ」

「・・・私は高木じゃない…警視庁捜査一課強行犯第三係の佐藤美和子よ」

「・・・佐藤刑事？」

「がつ 餓鬼が…」

「ウラアアアアア」

見事に背負い投げが決まった

「10時36分逮捕します」

不審者のことは終止符を切った…だか…

「さっ佐藤さん」

「高木くん遅いわよ」

「すみません」

遅れてきた高木は佐藤にこっぴどく絞られた

「佐藤刑事」

「あら歩ちゃん」

「帰っちゃうの？」

「…えっ？」

「もう学校来ないの？」

そうだ、学校の事を忘れていた

「・・・んー・・・体が戻るまでいるわ」

「・・・本当？」

「ええ…この桜の代紋に誓うわ」

「絶対だよ!!」

「・・・って事で勤務は夜に…」

「はっはい…」

いつ戻るかとはわからないけどずっとこの子達と一緒に居られる幸せ

例え・・・（高木＋佐藤＋小学生）（後書き）

話が噛んでないところは見逃して下さい

BAKA（高木×佐藤）（前書き）

題名が馬鹿ってなんだよ（汗）

BAKA（高木×佐藤）

「思い通りにならなかった。だから殺してやった」

犯人は殺された男性の婚約者。

突然婚約解消を迫られて殺したと言う

「あの人を殺した後、私も死ぬつもりだった」

・・・ヤンデレか…

「だからといって人を殺して良いと思っているのですか？」

「・・・高木くん、挑発しない!!」

高木のコメントに佐藤が突っ込む

わりと本気だったのになあ

「佐藤さん、黙ってて下さい。友坂さん、貴女は中崎さんのこと、どう思っていたのですか？」

「・・・分からないわ」

「殺してー自分も死んで、どうしようとしていたんですか？」

「罪滅ぼしにはならないわよ」

佐藤が呟く

「罪滅ぼしよ…」

なかなか取り調べは進まない

「ーあの人は馬鹿だったー」

突然友坂が口を開いた

「私と言う彼女がいながら他の馬鹿女のところに通っていた…だからよ…理由はないわ」

「ー…そうですか…」

すると突然佐藤が立ち上がった

バシーン！！！！

「甘ったれるんじゃないわよー！！」

「さっ…佐藤ひゃん!？」

どうも佐藤はまちがいて高木のほつぺたをたたいたようだ

「何よ…貴女なんかに私の気持ちが…」

パン!!

「わかるわよアナタの気持ち…大切な人を失いたくなかったから…あの世で一緒に…て思ったのでしょ？」

「……………」

「貴女はふざけてる」

佐藤は高木の肩を引き寄せた

「私だって高木くんが別れようって言うてきたら殺したくなると思う」

…ぼくまだ死にたくないですよ

「でも…」

「何よ!!黙ってて」

佐藤は犯人を怒鳴り付けた

「でも殺したら会えなくなる」

「
…」

「私は殺さない…話し合う」

沈黙が漂う

「私は馬鹿ね…」

「そうね…とんだ馬鹿被疑者ね」

その後

「高木ーお前美和ちゃんと付き合ってるそうじゃないか」

「ひー」

「吐けよ…どこまで進んだのか」

「みつ美和子さんのバカアアア」

取り調べさ6時間にも及んだそうだ

END

B A K A (高木×佐藤) (後書き)

馬鹿馬鹿小説になっちゃった

猫と犬（高木×佐藤）（前書き）

はらへった（笑）

猫と犬（高木×佐藤）

「今日涉くんち行く」

いきなり美和子さんが行ってきたのは僕が取り調べを始める数分前

「僕、いつ取り調べが終わるかわからないですよ」

「待ってるからいい」

「…暇ですよ」

「夕飯作って待ってるから」

てなことで取り調べを終わらせ家に帰る

「ただいま…なんか焦げ臭さ!!」

「お帰り」

「美和子さん…何作ってるのですか？」

「…わからない物体」

「!!!!!!!!!!!!!!」

机の上にはこげた卵焼き、魚、切り干し大根みたいな物があつた

「見た目より味よ味」

「いただきます」

僕はいつ意識が無くなるのかわからないため先に風呂に入ってからご飯にした

「…美和子さん…お米べちゃべちゃです」

「…本当だ!!」

「今度炊き方教えましょうか？」

「うん」

卵焼きをたべてみる

「…ある意味すごいです」

外は黒焦げ中は生

「たっ食べれたらいいの!!」

切り干し大根らしいもの…

「…甘いですね（笑）」

「あはは砂糖と塩間違えた」

笑ってごまかさないでください

「ぼく、味噌汁くらい作りましょうか？」

「どうどうせ食べられナインでしょ」

「いっいや…大丈夫ですけど」

「いいもん」

なっ何か気にさわる事言っただかな…

「いや…僕は甘党なので平気ですよ」

「馬鹿馬鹿！！バカバカバカバカバカバカバカバカバカバ…」

馬鹿って…

途中から力バになってるし

「いやっその…」

「ごちそうさま」

やばい本格的に怒らせちゃった

「ぼくが悪かったです」

「…」

「気にさわる事いつてすみません」

「…馬鹿」

いきなり美和子さんが振り向いて抱きついてきた

「私が馬鹿なの」

「えっ？」

ということだ

「やつヤキモチ焼いてた」

「??？」

「料理ができる涉くんにヤキモチ焼いてた」

「えっ…」

「…大好き」

…話変わってない？

「今度涉くんが作って」

こんな美和子さんが好き

「わかりました！！リクエストは？」

「煮物!!」

「わかりました」

e n d

おまけ

「わー涉くん料理上手ねー」

「そうですか？」

「しかも美味しい」

「!？」

「何？」

「…つまみ食いですか」

「あつ（笑）早くたべよ!!朝から何にも食べてなかったからお腹ペッコペコ」

強制終了

猫と犬（高木×佐藤）（後書き）

涉くんの煮物食べてみたい！！

ありがとう（佐藤＋宮本）（前書き）

長い駄文に…

ありがとう（佐藤＋宮本）

「私たちってどうやって出会ったっけ」

「警察学校よね…」

「ヤアアアア！！メーン！！」

今回は剣道の時間

「あー面タオル（手拭い）忘れたー」

「由美ー何回目よー」

佐藤の隣で数人の女の子たちが集まっている

「誰が二枚持ってない？」

「私は最初に配られた一枚しかないわよ」

「私もよ」

みんな一枚しか持ってなく、宮本は唸っていた

「…私の使う？」

「えっ？」

佐藤は彼女…宮本に声をかけた

「私は5枚持つてるし」

「…なぜそんなに…」

「私、高校は剣道だったから」

「いいの？」

「もちろんよ」

「ありがとう！-！」

「由美との出会って面タオルね…」

「そうね」

「今日の授業はここまで！！整列！！姿勢を……」

「ありがとうございました」

「佐藤さん!!」

「なあに？」

「ありがとうございました!!」

「いいわよ」タオル貸して？」

「あつ洗って返す!!」

「いいわよ」

「で…メールアドレスと番号、部屋番を教えてください!!」

「…そんならいなら教えるわよ」

「？」

「私に面タオルを借りて友達になろうとしたのでしょ？」

「…すごい推理力」

「ありがとう（笑）」

「洗うのは洗うから…私のプライドもあるし…」

「そうね（笑）はい、アドレス」

「部屋番号…38？」

「うん…たまたま美和子で38よ」

「私、今日から相部屋で…」

「宮本由美さん？」

「うん」

「まあ…よろしくね」

「ヨロ…！」

「・・・広いわね…」

「まあね、荷物の整理、手伝うわ」

「ありがとう」

「…改めて佐藤美和子です美和子って呼んで」

「私は宮本由美、由美って呼んでね」

「案外ハチャメチャな出会いって感じだったわねえ」

「確かにね」

「まあ由美の忘れんぼのおかげで仲良くなれたんだし」

「美和子酷いわよ」

「でも由美の裁縫はすごかったわね」

「ああ…美和子が柔道で柔道着破ったやつ？」

「私が破った訳じゃないわよ」

「わかってるって」

「私達、これからも仲良くしましょうね」

「美和子が高木んとこ行かないよう私が邪魔するから」

「…友人の幸せの阻止？」

「正解」

美和子…私達、いつまでも仲良くしようね

由美…いい友達でいようね

e n d

ありがとう（佐藤＋宮本）（後書き）

駄文ですみません（笑）

桜舞う（千葉＋三池 宮本）（前書き）

千葉くんは全然でません

苗ちゃん主役です

主に苗ちゃんと由美さんでふ

桜舞う（千葉＋三池 宮本）

千葉くん…私のこと覚えてる？

あのと私を叱ってくれた千葉くん

私、今日から警視庁に配属されることになったよ

「今日から交通課でお世話になる三池苗子です！！まだまだヒョッコですけどお願いします！！」

4月20日、私は交通課に配属された

「三池さんの担当は由美くお願い！！」

「ほえ？」

いかにも寝てました！！って感じの女性

「あんなに寝てるのよ」

「すみません（汗）ついさっきまで美和子…刑事課の佐藤、高木、千葉と検問やって…」

「なんで刑事課が？」

「殺人の…」

「そこからはいい！！言わなくて分かったわ…じゃあよろしくね」

「んーパトロールいくか」

「フラレタアアア？」

「まあそういうことになるなあ」

「いいこときいた美和子に教えてやろっ」

「あの…振られたってことはフリーですよね」

「まあ…つか貴女だね？」

「交通課に配属された三池苗子です…！ヨロシクです…！」

「…千葉とクラスメート？」

「ええ…向こうは忘れてるみたいですけど」

「あの千葉がどうしたの？」

「えっ？」

「まさか、あの千葉が初恋とか？」

「まあ」

由美さんは時々いい線まで迫ってくる

「ええ！？こないいい子が千葉なんかを？」

「こんなじゃないです…童顔で可愛いし…」

「ユーミー！！」

「美和子！！久しぶり！！」

「一週間ブリね」

交通課にこんな人いたっけ？

一週間前だから私ができる1日前？でも私服だし…

「はじめまして！！刑事課の佐藤美和子です！！」

「けっ刑事課の刑事さん！？」

「苗子！この人は警視庁捜査一課強行犯第3係警部補、正真正銘の

デカよ〜んで私の親友で高木の恋人!!」

「由美つてば!!—いらないところは言わないの!!—」

「いいじゃない」

「さとーさん目暮警部が呼んでまーす」

「ええ!?!千葉くんありがとう!!—じゃあ由美、三池さん、またね」

「バイバイ」

「千葉くん、この子見覚えない？」

「交通課の新入りさんですか？」

「ええ」

「千葉あ!!—報告書あと10枚!!—!!—!!—」

「高木さん!!—!!—!!—!!—」

「倍にするか、やるか」

「やりますよぉ……」

嵐は去っていった

「パトロール行きましょっか」

「あっはい」

「桜吹雪ですね…」

「綺麗ね」

「私が転校する日もこんな日でした」

「そう…今から帝丹小に行こっか！！」

「えっ？」

「チラシ渡さなきゃだめだし」

さっ 佐藤さんだ…

「これねえ美和子の隠し撮り」

「！？」

「渡すのは探偵団の5人だけだ」

「探偵団？ですか」

「前、千葉と話してた5人」

「ああ……」

「行きましょっ」

「はい!!」

「変わってないです」

「そう?」

あのかきは送ってくれた桜吹雪

今回は私を受け入れてくれてる

千葉くんが私を覚えてなくてもわたしが千葉くんに告白する

「入ろっか」

「はい」

足を踏み入れる

新たな世界への桜のなかに

桜舞う（千葉＋三池 宮本）（後書き）

なっなんだこれ！！

意味がわからない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1549y/>

ONE FOR ALL

2011年11月20日04時06分発行